

Title	イスパニア語不活動体名詞における語尾-a/-oの対立と意味
Author(s)	出口, 厚実
Citation	大阪外国語大学学報. 21 p.77-p.94
Issue Date	1969-03-20
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80352
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

イスパニア語不活動体名詞における

語尾 -a/-o の対立と意味

出 口 厚 実

El contraste y la semántica de las vocales finales -a/-o en los nombres inanimados del español.

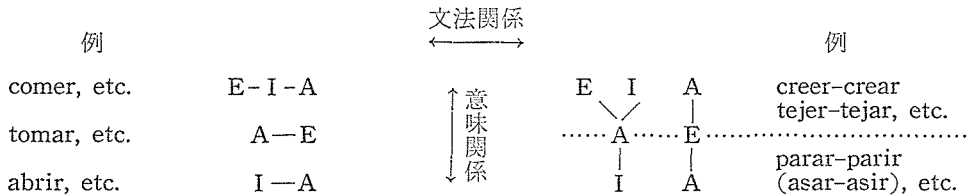
Atsumi DEGUCHI

La estructura fonológica del español tiene por característica la predominación de sílabas abiertas formadas con 5 fonemas vocales /a/, /e/, /i/, /o/, /u/ como centro de la sílaba. Siendo estas vocales miembros constituyentes de los morfemas, no desempeñan una función positiva por sí solas, sin embargo el contraste de dos o más vocales hace gramaticalmente un papel muy importante tanto en la conjugación del verbo como en otras partes de la oración. De estos contrastes vocálicos aquí va a ser estudiado el de dos vocales -a/-o en la última sílaba de los nombres inanimados con atención a sus antecedentes en el latín y a su formación diacrónica.

序

イスパニア語の音韻構造は5音素 /a/, /e/, /i/, /o/, /u/ による母音中心の開音節構成の優勢にその特徴をみることができる。これらの母音は、前置詞や接続詞の/a/, /i~e/, /o~u/のように完全な独立形態素になることもあるが、ほとんどが語根・接辞の構成分子であって子音と不可分的に結合するために母音自身が独立性を主張することは稀である。しかし2個以上の母音の対比に文法的、意味的に有効な働きが認められる場合が少なくない。例えば動詞活用において母音対比がしばしば重要な役割を果たす。amA/amE, vinE/vinO ではそれぞれ -A/-E, -E/-O の2母音対比が法・時制・人称を決定している。文法的音韻転換は語末音節の母音に行なわれるのが原則であって、その他の位置にこのような現象が起こるのは例外的と言えよう：v. gr. comEmos

-comImos-comAmos。これら 1 人称複数形は中間 3 母音 E-I-A の交換によって直説法現在・直説法過去・接続法現在という動詞の文法的カテゴリーを表わす。同様に tomarAmos-tomEmos ; abrImos-abrAmos の A-E, I-A 2 母音対立が時制・法の弁別手段となっている。規則活用動詞のすべてに適應される A-E, I-A; E-I-A と同時にある限定された範囲の動詞意味分野に機能する E-A, I-A, A-E 及び A-I, E-A の対比が存在する。



また同一形態の対立が動詞内部だけに限らず、動詞と他の構成要素との間に異種の文法関係を示すことがある。*/ama/-/amo/* には 2 種類の異なる対比があるのに気付く。即ち *él ama(ella ama...): yo amo* を思い浮べると共に *el ama (una ama...): el amo (un amo...)* なる名詞概念の対称を認める。最終音節の母音転換は名詞の文法的範疇にも及んでいるが、動詞に見られる非語末音節の母音交換を名詞に適用すると、無関係な別語形と意識される。*/kasa:/ /kosa:/ /kisa/* や */kaso:/ /koso:/ /keso/* の第一音節にある */a:/o:/i/* または */a:/o:/e/* の対照は文法的にも意味論的にも何ら有意な対立を構成しない。*amOntar/amAntar; calabOzo/calabAzo* も偶然に特定音節中の母音のみを除いて共通の形をしているに過ぎない。ところで *fruta/fruto* の 2 語を対比すると、語尾 *-a/-o* は両者の文法的性の指標という副次的機能と並んで一定の意味範囲内での語義の差異を決定する本質的關係を包含するように思われる。この他 *huerta/huerto, leña/leño* など、類似の対立様式が存在するが、これらは (el) *ama/amo* とは同じ関係ではない。前者には意味対応の不規則性・多様性があり、後者の場合、活動体(有性物)名詞における生物学的性の規則的対応が明確である。*fruta/fruto* に代表されるように、不活動体(無性物)名詞における母音対立のなかで特に多くまたその形態素的機能の大きい *-a/-o* を通時的側面に考慮を払いつつ考察し、現代イスパニア語の語彙意味体系の把握の一助としたい。

I 語末母音の形態とその成立

イスパニア語では名詞語形の基本形(単数形)が語尾に *-a, -e, -o* などの母音を持つ場合が著しく多い。特に *-a, -o* 語尾の頻出は初学者の誰しもがすぐに気づく程であるが、実際どの程度が語末開音節であるのか、また *-a, -o* を末尾母音としているのだろうか。単に語学教授上の規準としてのみならず、いわゆる *basic vocabulary* として信頼度の高い Harry J. Russel のリストを用いて、名詞語尾による簡単な分類を試みた。Keniston 等の調査で出現頻度数が上位にランクされた語に、更に科学的方法により決定された追加重要語を加えた上記リストの総語数 2,776 語に占める名詞 1,349 を語尾によって分類すると次の通りである。

語 尾	o	a	e	y	u	n	d	r	l	s	z	c	f	j	計
語 数	476	454	116	3	1	128	58	49	23	19	19	1	1	1	1,349

上表で見る限り -a, -o は他を圧倒しており、両者を合わせると全体の $\frac{2}{3}$ を越える。また前述の語彙集には男女両形をもつ名詞に対し男性形のみが掲げられていることを考慮に入れねばならない。例えば muchacha は当然基本語彙の中に数えられるべきであるがこのリストの見出し語には現われていない。従って名詞総数中に含まれる -a, -o 語尾名詞の割合は更に大きくなるものと見て差支えないであろう。-a, -o 語尾以外でもかなり少数の母音と子音に集中しており、-a, -o に次いで多いのは母音 -e と子音 -n, -d, -r で c, u, j, f, y, 等は例外的少数である。

歴史的にはこれらの名詞末尾母音はラテン語対格語尾母音に遡る。俗ラテン語では既に第4格変と第5格変はそれぞれ第2・第1格変と区別されなくなった結果、語尾の特徴として -a (第1格変), -o (第2格変), -e または子音(第3格変)の3通りに吸収された。これが現代イスパニア語にも引き継がれて、前表のようにその比率は全体を概ね3等分(454:476:415)している。俗ラテン語からイスパニア語への移行過程での音韻変化は中性名詞の特徴語末子音を消失させ、それを男性化したために、語尾にあっても明瞭な音色を維持している -a/-o は文性的性に対応する明快かつ基本的な指標となった。ギリシャ語源の外来語や、後部切断によって生じた省略語を除けば、例外は数える程である。

II -a/-o の一般的意味

文法上の性は生物学的セックスを有するものに対しその性別の必要性に応じて -a/-o を同一語幹に付加することにより表わされる原則はラテン語を受け継いでいる。しかし古典ラテン語には自然性の性別としての -a, -us とは無関係に、少数ではあるが無性物を意味する名詞にもこれらの語尾の対立があって、それらは多かれ少かれ語源的有縁性をもっていた。porta/portus は現代イスパニア語にはほぼ原義のまま puerta/puerto の対立をもって継承されている一例である。この場合‘扉、入口’と‘港’の意味は同根の印欧語根 $\sqrt{\text{per}}$ に由来するものと考えられる。勿論、外形上 -a/-o 対比を見せていても必ずしも同じ語根から派生したとは限らず、ある時代で異形であった2語が一方または双方の蒙った音韻変化で語幹を変形されたため、あたかも同族語のように認められる形態をとるようになった例も少なくない。イスパニア語 cera/cero は見せかけの -a/-o 対立であって、語源的に両語は別箇のものである。cera は lat. cēra ‘蠟’から出ているが cero の方はアラビア語源の中世ラテン語 cifra ‘ゼロ’に由来する。

特に注目しなければならないのは、イベリア半島のロマンス語として独自の発達をとげ始めて以来、カスティリヤ語にこの -a/-o 対立の現象が増加する傾向を示し、既存の -a または -o 語尾の名詞に対し俗ラテン語時代になかった新語義を持つ語形が対応の -o, -a を語尾として多数派生したことである。これにはイスパニア語語末母音 -a, -o 音の音韻的安定が前提になっており、その結果、同音異義語や一音多義語の頻出を防ぐ有効な手段として、この様な類音語併用を確立

した。逆にこれが語尾母音を明瞭に維持するのに寄与するという一面も考慮される。

有契的な語彙体系を構成している対立としては、果実・樹木名にみられる。manzana / manzano の様に、樹木を表わす -o 語尾名詞はその果実を意味する -a 語尾の名詞と対になっている。この -a はラテン語中性名詞の複数語尾であり、元来果実の集合体を意味していた。lat. hortus は huerto となったがイスパニア語は huerta を付け加えた。espino ‘さんざし’ は espina < lat. spīna ‘刺’ から派生した同族語である。rama/ramo ‘枝’ では前者は後者よりも新しい時代に生まれたものであるが、意味上の差は小さく、ramo は rama よりも小さい感じがし又、比喩的派生的意義では若干違いがある。これらの一次語に加えて接尾辞にもこの -a/-o 対立がしばしば見られるのは当然である。-era/ero を示す語は夥しい数に達するし、barca/barco > barquilla / barquillo の如く -illa/-illo の示小接辞により既存の対立の上に更に一对を加えたものも発見される。

このように複雑多岐な成因をもつイスパニア語の語尾 -a/-o 対称名詞を不活動体一次語に限定して、その形成と意味論的範疇を探り出す手掛りを求めることがここでの目的であり、-a/-o 対立の構造と意味との一般的相関々係の存否あるいは両者間に意味論的定則を認め得るものかどうかについての問題への接近を目指し、多様な対立例をいくつかのグループに分類し検討してみたい。尚、便宜上現代イスパニア語の名詞を語源的構成要素を基準として、次の如く分類し、それぞれの記号を用いることにする。

N—ラテン語名詞に起源をもつ語		N'—イスパニア語名詞から派生した語	
A—	“ 形容詞 “	A'—	“ 形容詞 “
V—	“ 動 詞 “	V'—	“ 動 詞 “

E—基層語（非ラテン語源語）及び Adstrata（外来借用語）

例えば Na—N'o と表示すれば、語尾 -a をもちその語源がラテン語に遡られる名詞と、語尾 -o 名詞で Na あるいは他のイスパニア語名詞から派生した名詞との対称を意味し、しかも両者は同一語源に帰する。すなわち N, A, V—N', A', V' には原則として由来的繋がりが認められるものとする。-a/-o の対立が明らかに異根に属する場合は Na—N'o のように—を以て示す。

1. Na—No の対立

現 -a/-o の旧型式ともいうべき -a/-us, -a/-um の対語が既にラテン語に見られるものがあり、それに対応した対立が現存している場合がかなりある。

ánima/ánimo は lat. anima/animus の語形と正しく相似している。尤もこれらは cultismo であって、lat. anima の直系子孫は postónica の母音消失と n の異化を受けた alma に見出される。pala ‘シャベル’ /palo ‘棒’ < lat. pāla ‘鋤’ /pālus ‘柱、丸太’ は原意味に近い対立を維持している。naba/nabo ‘蕪’ も lat. napa/napus に源をもち、clava/clavo は lat. clāva ‘棍棒’ /clāvus ‘釘’ を原型にしている。barba/barbo < lat. barba ‘ひげ’ /barbus ‘白魚’ も同様 Na—

No 対立である。cincha ‘馬の腹帯’ /cincho ‘帯金’ <lat. cingula/cingulum で元の意味を留めているが -o 形には cultismo の cingulo ‘法衣の絹ひも’ が共存している。bicha/bicho 両語とも lat. bēstia から出ているが -o 形は古典時代の bēstia に代って使われ始めた俗ラテン語 bēstius が gallego-portugués の bichó を経てカスティリヤ語に入ったものと考えられる。イスパニア語で bicha は ‘蛇’, bicho は ‘虫けら’ の意にそれぞれ特殊化された。lat. manica ‘tunica の袖’ 及び派生語たる lat. vg. manicus から manga/mango=‘袖’ /‘柄’ の対立が生じた。俗ラテン語 capitia <lat. caput と lat. capitium ‘頭被’ とが cabeza/cabezo ‘山頂’ を与えた。同じ‘頭’の意で14世紀頃まで使われた tiesta <lat. tēsta ‘土器’ は tiesto <tēstu ‘鉢’ と平行しているが tiesta の方は ‘たるの鏡板の縁’ を意味するに至り, ‘頭’ の比喩的意義が testa に復活した。lat. brachium の複数である brachia ‘両腕を広げた幅, 尋’ から braza ‘尋’ が生まれ, brazo <brachium と対をつくっている。acta/acto は lat. actum の複数形 acta と actus に対応する。中性名詞の複数形がその単体の複数又は集合概念だけでなく他の意義を概にラテン語に持っておりそれが現代に受け継がれている例に更に gesta/gesto があげられる。gestum ‘行なわれた事’ の複数には ‘手柄’ の意味にも使われていて gesto <lat. gestus ‘振舞, 身振り’ と共に -a/-o 対立を見せている。

puerta/puerto は前に述べた様に lat. porta/portus に遡るが両語には共通の語根を認める。pila/pilo ‘投げ槍’ <lat. pila ‘臼’ /pilum ‘投げ槍’ も同じ語根に拠ると思われる。ラテン語にあった caballa ‘牝馬’ /caballus ‘騾馬’ のうち前者に対応するイスパニア語 caballa は ‘鯨’ を意味し, caballo は広義の一般的 ‘馬’ になった。‘牝馬’ は yegua <lat. equa によって表わされる。lat. quadra/quadrum は共に ‘正方形’ を意味していたが, esp. cuadra は ‘馬小屋’ に使われるようになり, cuadro が原義を残している。

2. Na—No <lat. 中性名詞

この型式はラテン語中性名詞の単複両形に由来する対立であって実例がかなり豊富である。lat. lignum ‘材木’ は leña/leño の共通語源で leña ‘たきぎ’ が leño ‘丸太’ に対し集合的意味の痕跡を残している。集合的に ‘帆’ の意味であった lat. vēla pl. <vēlum では集合性の原義は薄れ, イスパニア語で複数形 velas が出現して女性単数名詞化した。一方 vēlum は ‘ベール’ の転義を得て velo に生きている。hueva ‘魚の卵’ /huevo も lat. ōva pl. <ōvum ‘卵’ から出ていると思われる。‘器, 什器’ を意味する lat. vās は vasa/vaso を生じさせたが前者 vasa ‘食器一式’ には元来中性複数語尾 -a の特徴である集合概念の名残が見られる。ラテン語で ‘回転機, 拷問具’ また比喩的に ‘苦悩’ の意味をもっていた tormentum はその単数形がイスパニア語 tormento に抽象名詞として引き継がれ pl. tormenta は専ら ‘嵐’ の転義で使われる tormenta となっている。ceja ‘眉’ /cejo ‘朝の川霧’ は lat. cilium ‘まぶた, 睫毛’ に, conseja/consejo はそれぞれ lat. consilium ‘忠告, 相談’ の単複形に由来する。dicha ‘幸福’ /dicho ‘言辞’ はい

ずれも *lat. dictum* が音韻変化を蒙った結果であり、複数形 *dicta* ‘言辞, 約束’→‘神託, 予言’→‘幸運’の意味変化がたどられる。*lat. fāta pl./fātum* ‘神託, 運’が *hado/hado* <*fada/fado* の対立を惹き起している。‘唇’ *labrum (labium)* の *pl.* が *labia* ‘多弁’を与えて *labia/labio* が存在する。*grana/grano* は明らかに *lat. grānum* ‘穀粒’が語源であるが, *grana* ‘えんじ虫’はイスパニア語で生じた新しい語義である。*cuerna* には‘角盃’と‘(集合的に)角’の両義があるが, 後者は *lat. cornū* ‘角’の複数形 *cornua* に廻り *cuerno* <*lat. cornu* (単数) と対を成している。*fila/filo* 及び同系の *hila/hilo* も *lat. filum* ‘糸’の単複形と関連づけられよう。

punta/punto については基底となるラテン語中性名詞 *punctum* ‘突くこと, 点’が考えられるが, *-a* 形には *pungere* の完了分詞から派生したと推定される後期ラテン語 *puncta* とも関係している。尚, *huesa/hueso* の場合, *lat. os* ‘骨’が *hueso* となったのは確かであるが, 複数形 *ossa* ‘骨格, 骨組’と *huesa* ‘墓穴’は語源を異にし, 後者は *fuesa* <*fosa* <*lat. fossa* ‘堀, 穴’から来ているものとみられる。

3. Na—No=果実—果樹の対立

俗ラテン語からロマンス語の成立を経て, イスパニア語に至る発達過程での形態部における中性の消失は, 樹木とその果実を表わす語の意味の変化・転移に大きな影響を及ぼした。現在 *Na—No*, *Na—N'o*, *N'a—No*, *Ea—N'o*, *N'a—Eo* の諸形式の対立の中になんかなり明確に意識されている果実名—樹木名の関係は, ラテン語中性名詞複数の女性単数化と対応女性語尾の男性化に伴う意味変化によって生じた *Na—No*= 果実—樹木の原式がイスパニア語に広範囲に定着して類似の諸形式に波及したもので, 今日でも語形成力を失っていない。古典ラテン語で樹木は恐らく神話的理由(樹木に *nymphae* が住むという)によって女性名詞であったが, 神話的要素からの解放あるいはその他の原因によって他のロマンス語と同様カスティリヤ語もこれを男性化した。これに伴い女性名詞であった‘木’ *arbor (arbos)* も男性へ移行した。果樹名が *-us* 語尾をもち第2格変に属す女性名詞であった時, ラテン語には次のような3語尾の対立が見られた: *cerasus*¹⁾ f. ‘桜桃’ / *cerasum (cerasium)* n. sg. ‘さくらんぼ (単体)’ / *cerasa* n. pl. ‘さくらんぼ’ (集合的)。ところが樹木名が男性化し, 格の混同消失の結果中性が男性名詞と同一視され, したがって *-us/-um*=樹木/果実は実際上区別されなくなり‘桜桃木’と‘さくらんぼ(個体)’は同一語形 *cerasu* になってしまったために, 何らかの方法により, 少なくとも樹と実の相違を維持する必要が起った。*cerasus/-um* の場合は *cerasu* から‘果実’の意義が消え, ただ‘桜桃木’に限定された。他方 *cerasa* はその語尾からして女性単数名詞として意識されるに従って複数概念は忘れられて行き, 果実の単体, かつて *cerasum* で表わされたものを意味するに至った。すなわち *-us* 果樹 / *-um* 果実 (単) / *-a* 果実 (集) から *-o* 果樹 / *-a* 果実 (単) / *-as* 果実 (複) の対立, *cerezo/cereza/cerezas* へと移行した。方言形 *pruna* ‘梅の実’ / *pruno* ‘梅の木’の対称も同様な過程を経過して *lat. prūnum* ‘李’ / *prūnus* ‘李の樹’から出ている。‘果実’と‘果樹’

とが曖昧になったため -u 形から両義とも失われて、‘樹’は形容詞接尾辞をとった補強形により示されるケースも起こる。lat. *pirus* は *peral* < (arbor) *piraris* (-alis) にとって代られて複数の中性 *pira* が個々の ‘梨’ *pera* を与え、新形式 *peral/pera/peras* が生まれて、*piru* は消失した。現代スペイン語では *pero* は別品種 ‘梨りんご’ の意義をもって生きている。但しアルゼンチンでは *pero* が *peral* に代り用いられ、従って *pero/pera/peras* 関係が再建されているのは興味深い。*figus* のように当初の対立がなく²⁾、-us f. 果実・樹木を同時に表わしていた語は -o < -us が ‘実’ のみを示し、‘樹’を表わすために接尾辞 -ārius をとった形容詞女性形 (arbor) *ficāria* から *higuera* となって、語幹が異なるばかりか -a/-o の関係に逆転している例もある。*pōmus* f. ‘果樹’、*pōmum* n. ‘果実’ はラテン語時代に既に混同され始めていて *pōmum* も ‘果樹’ の意を有していたが、*pōmus/pōmum/pōma* > *pōmu/pōma* になり -a 形式は一般的な ‘果実’ から ‘りんご’ に特殊化され *poma* にその複数形 *pomas* と平行して発展している。尚 *poma* は後に *manzana* に排除されて現在ではりんごの一品種名として原義の名残を残している。又 *pomo* < *pōmu* は *poma* よりは意味の広がりを持つ ‘りんご類の果物’ となっている。ここでは -a/-o が果実/果実に帰して、果樹は系統の異なる *manzano* が引き受けている。このように果実/果樹の対立の中で樹木語が衰退し完全に消失したり、派生語形や新造語によって表わされる例が存在する一方、逆に本来そなえていなかったか又は区別が曖昧であった ‘樹’ の意味を強化するために -a/-o に分離して対照を明確化した場合も発見される。オリーブの実を示す普通の語は *aceituna* であるが、lat. *oliva* から出た *oliva/olivo* が一般的果実/果樹関係を成立させている。lat. *oliva* はオリーブの木、実、枝等漠然とした意味であり、*olivum* ‘オリーブ油’ と対立していた。*oliva* から ‘樹’ の語義の脱落が起こり果実に限定されていったが、今ではアラビア語系の競争語 *aceituna* に地を譲りつつある。同時に ‘オリーブ油’ *olivum* も同系の *aceite* によって表わされるようになった結果、-um 形は多数の -o/ 樹木語の類推により *olivo* ‘オリーブ(木)’ として定着した。又 *aceituna* からは *oliva/olivo* と平行するように -a/-o 対立意識に支持されて *aceituno* (= *olivo*) が誕生した。lat. *castanea* ‘栗’ < 形容詞 *castaneus* は *arbor castanea* と *nux castanea* の両者を意味していたが、*arbor* の男性化と相まって ‘栗の木’ は *castaño* と変化し *castaña* との対立を生んだ。lat. *castanea* はギリシャ語 *καστανον* ‘栗の実’ を移入したものであるが、これは栗の産地として知られる Pontus にある都市名 *Καστανα* に由来するといわれる。上例に見られるように、Na—No = 果実—果樹から Ea—N’o = 果実—樹木 (*aceituna/aceituno*) や Na—N’o = 果実—樹木 (*castaña/castaño*) の類似形式が派生した。

梅を意味する現代スペイン語 *ciruela/ciruelo* の歴史をたどれば、ラテン語で *cereola prūna* ‘ろう色の李’ と呼ばれていたものの形容詞だけが残し ‘実’ を表わす *ciruela* となって、後に樹木語 *ciruelo* を得て対立を構成したことがわかる。果実につけられていた固有名詞起源の形容詞が独立して名詞になったものとしては、*manzana/-o*、*avellana/-o* がある。B. C. 1 世紀の農芸家 Caius Matius から発するといわれる有名な一品種、lat. *vg. mala mattiana* の後部のみ

残った *mattiana* をへて *manzana* に変り、対応男性形 *manzano* も現れた。これは古典ラテン語 *mālum* ‘りんごの果’、*mālus* ‘りんごの木’ の対立が既に崩壊し、*-a/-u(o)*=果実/樹木が確立しはじめていた時代に生じた。‘はしばみ’ *avellana* はその産地であった *Campānia* の *Abella* を冠した *avellana nux* が語源で後にその樹木を意味する *avellano* が作られた。 *almendra/almendro* ‘アーモンド’ <lat. *amygdala* はギリシャ語 *αμυγδαλον* に起源をもつが、lat. 後期には *-a*, *-um*, *-us* の3形を有し、*-a*, *-um* が混同され、いずれも実・木の両意に用いられた。

-a/-o=‘実’/‘樹’はアラビア人の侵入や新大陸の探險等によって移入された多くの新植物に対しても適用されて *Ea—N’o*又は *N’a—Eo* の対立が成立する。Arab. *nananj* からくる *nananja* は殆ど同時にその樹木 *nananjo* を対置させていた。‘バナナ’ *banana/banano* はベネスエラ北東の *chaima* 族の言語あるいは西インド諸島の *taino* 語に由来するといわれるが、一方では lat. *platanus* f. ‘すずかけの木’を受け継いだ *plátano* がアメリカ大陸で新語義(= *banana/-o*)に用いられるようになり、植物全体と実とを区別しない。 *pimienta/pimiento* の *-a/-o* は現代語においては他の植物名に見られる関係から外れる。今日の意味には、‘胡椒の実’/‘唐辛子’の差があり、別の植物の実又は植物全体と果実の両方を指している。 *pimienta* の木は普通 *pimentero* で示されるが *pimiento* を用いる場合もある。語源の lat. 中性名詞 *pigmentum* ‘染料’の複数形は‘薬剤・薬味’の意で使用され始めていた。その他にも果実/樹木対応の例は見られるが次のような種々の語源の語はその一部分である。

テラン語から

azarolla/-o さんざし <lat. *acerabula*, *cidra/-o* まるぶしゆかん <lat. *citrus/-um*, *granada/-o* ざくろ <lat. *granatum*, *guinja/-o* なつめ <lat. *zizyphum*, *jinja/-o* なつめ <lat. *zizyphum*, *serba/-o* ななかまど <lat. *serbum/-us*

アラビア語から

acerola/-o 西洋さんざし, *azufaifa/-o* なつめ, *toronja/-o* ザボン

アメリカ原住民語から

guaba/-o=*guama/-o* グワモ, *guaranga/-o* アカシア, *lúcuma/-o* ルクモ, *tapara/-o* ひょうたん, *totuma/-o* ひょうたん

フランス語から

frambuesa/-o 木いちご, *sangüesa/-o* 木いちご

語源不詳

agavanza/-o 野ばら, *gavanza/-o* (‑a形は花) 野いばら, *guinda/-o* みざくら, *guindilla/-o* てんじくまもり

更に *-a/-o* を‘実’/‘木’の対応に止めず、特に人間生活に有用な一部分と全体との対照へと拡大使用する傾向がある。‘菩提樹’ *tila* <lat. *tilia* は一般式に合致する後発の *-o* 形 *tilo* と競合しこれに敗れ現代ではほぼ *tilo* に固定しつつある。しかし *tila* は煎じて飲用される‘菩提樹の

花’と薬効あるというその‘煎茶’の意味に用いられる。canela ‘肉桂’<lat. cannella に対する canelo ‘肉桂樹’や quina キナ皮<ケチュア語？に対する quino ‘キナ樹’にも同様な関係が認められる。

4. Na—No<同一語

2. の Na—No<中性名詞の場合と類似しているが、対応語尾の原型をラテン語に持たない点が相違する。raya/rayo は共に lat. radius の派生語と見られ、前者は radius にあった‘車輪軸’から‘線’となり、rayo の方は‘光線’の意味を継承している³⁾。

5. Na—N'o, N'a—No の対立

ラテン語名詞に起源をもつ -a 又は -o 語尾の名詞がイスパニア語において対応名詞を派生させた場合で、これに属する実例は相当数に達する。従ってここで全てを取り上げることは不可能であるので主要なもの、タイプの異なる代表的なものを中心に検討してみたい。最左欄に掲げられた N' が歴史的に一番新しい語形で、これは N から派生し、N は右欄のラテン語に起源をもっている。

a) N'a—No 対立語

N'a	<	No	<	lat.
anilla カーテンの掛輪		anillo 輪		ānulus 指輪
campo 禿地		campo 野原		campus 平地
canasta 柳籠		canasto 深い柳籠		canastrum 柳籠
cangreja 不平行四辺形の帆		cangrejo かに		cancriculum 甲殻類
cántara 壺		cántaro 壺		cantharus 大杯
cepa 根本		cepo 太枝		cippus 尖り棒
criba ふるい		cribo ふるい		cribrum ふるい
cuchilla 刃物		cuchillo 小刀		cultellus 小刀
cuera ゲートルの一種		cuero 皮		corium 皮
cuerna 角さかずき		cuerno 角		cornū 角
cuña くさび		cuño 刻印		cuneus くさび
fruta 果物		fruto 果実		fructus 果実
grada 段		grado 度		gradus 歩み
huerta 果樹園		huerto 果樹の植込み		hortus 庭
loma 丘		lomo 背		lumbus 腰
manta 毛布		manto マント		mantum マント
poza 水溜り		pozo 井戸		puteus 井戸

racima 葡萄の小房
 rama 枝
 raña 蛸かぎ
 rastra 跡
 ría 潮入川
 risa 笑い
 saca 大袋
 serena 夜露

racimo 房
 ramo 小枝
 raño 海ます
 rastro 跡
 río 川
 riso 笑い
 saco 袋
 sereno 夜露

racēmus 葡萄の房
 rāmus 枝
 arāneus 蜘蛛
 rāstrum 鍬, 鋤
 rīvus 川
 risus 笑い
 saccus 袋
 serēnum 晴天

b) Na—N'o 対立語

N'o <
 barco 船
 boto 小形革袋
 bolso ハンドバッグ
 campano 鈴
 cenizo [植]あかざ
 cesto 大かご
 cigarro 葉巻
 copo 綿・麻玉
 corcho コルク皮
 cubo バケツ
 cuenco 木椀
 cuesto 岡
 espigo (道具の柄へ差す)
 差し込み
 espino さんざし
 hacho 松明かがり
 hoyo 小穴
 madero 丸太
 mazo 大槌
 mosco 蚊
 orillo 織り縁
 rento 小作料
 sayo 上っぱり
 tejo 石蹴玉

Na <
 barca 小舟
 bota 革袋
 bolsa 袋
 campana 鐘
 ceniza 灰
 cesta かご
 cigarra 蟬
 copa 盃
 corcha コルク
 cuba 樽
 cuenca 鉢
 cuesta 坂
 espiga 穂
 espina 刺
 hacha 松明
 hoyo 穴
 madera 木材
 maza 槌鉾
 mosca 蠅
 orilla 縁, 岸
 renta 年金
 saya スカート
 teja 瓦

lat.
 barca 小舟
 buttis 酒袋
 bursa ポケット
 campāna 鐘
 *cinisea 灰
 cista 箱
 cicāda 蟬
 cuppa⁴⁾ 盃
 cortex 樹皮
 cūpa⁴⁾ 樽
 concha 貝
 costa 肋骨
 spica 穂
 spīna 刺
 facula 小松明
 fovea 陷穽
 māteria 材木
 *mattea
 musca 蠅
 ōra 縁, 海岸
 reddita
 sagia 小マント
 tēgula 瓦

tino 桶	tina 染料用の桶	tina 酒びん
túnico 長着	túnica 外被	tunica 下着
vendo 織耳	venda 包帯	vitta 細帯

-a, -o の各語尾が個別に接尾辞のような明確な具体的機能と意味対象を持っているわけではない。ただラテン語の -um と -us の対比が植物（殆ど果樹）を表わす名詞に対して示していた部分や全体の意味対立の変形として、やはり植物に関して -a/-o の形式的対立が一般的に認められる生産力のある要素として存在しているだけである。これと並んでラテン語中性名詞から誕生した -a/-o 名詞の存在が、かなり古い時代から類音類義語の対として意識され、造語形式の様式として確立発展する潜在的基盤を成していたと考えられる。そこで意味変化・派生の様式の中で最も基本的なのは指示物に形態的に又は機能的に相似した同一意味領域の物象を表現する形式として同一語幹と対応語尾をもつ新しい語形が生れる場合である。さらに相似にとどまらず近似的な意味をもつ変種派生語の構成法としてこの -a/-o 対立を多用する傾向が大きくなった。意味相似の最も一般的な様式は物体の外観・形状を比較し、その客観的類似性を認識して、それに対応新語形を与えるものである。-a/-o 対立の中には、特に指示物の同種類中での大小の違いを示す対語が少なくないがこれは上の様式の典型的なものである：barca/barco, canasta/canasto, cesta/cesto, hoya/hoyo, huerta/huerto, rama/ramo, saca/saco, etc. これらの例からもわかるように語尾の-a又は-oが大形、小形いずれかの示差性を有しているというのではなく、意味における示大、示小は両語の対照によって相互に規定される。

同一種物の下位区分として類名詞から対称語尾をとって派生するケースも多く、原名詞はそのまま総称的命名の価値を維持するか、あるいは新語と共に語義の野を分割し、意味の近接した対等の2語となる：bolsa/bolso, campana/campano, cuba/cubo, cuenca/cuenco, etc. fruta/fruto では同一物が植物学的名称と食生活上での呼び名の差が語尾対立に示されている。すべての fruta は同時に fruto でもあるが、fruto のうちで特に食用に供する水分の多いものが fruta である。

しかしまた、-a/-o 語尾の2語の意味上の差が小さく、混同されほぼ同義で通用する競争状態にあることもある：cántara/cántaro, criba/cribo, rastra/rastro, serena/sereno, etc. 両語の競合によって一方の新義が生まれ、例えば cántaro ‘土製、陶製の壺’と cántara ‘牛乳運搬用の金属製容器’のように新対立へ向かいつつある場合も見られる。また一方が衰退し特殊分野の使用に限られているものに risa(共通語)/riso(方言・古語)がある。

形状や機能の相似に対する陰喩によって対応語尾をもつ新語形が生まれるケースも多い。cangreja/cangrejo, cigarra/cigarro, loma/lomo, grada/grado, etc. grada/grado はラテン語にあった複義が対立形の派生により分割され比喩的意味の抽象名詞と具象名詞とを対照させている。

-a/-o が同一物質の加工の有無や物質名詞と普通名詞との対位を示す場合がある。corcha は

派生語 *corcho* と競争し一時期には同義で使用されたが現在では *corcho* はコルク製の樹皮で未加工の状態のものを意味するのに対し、*-a* 形は材質・製品としてのコルクを指す。*madera/madero* にも類似の意味関係が認められる。

類音語対と意味とのもう一つの関係は意味領域の共有である。一定の意義によって指示される対象の一部分、特に対象全体の中で関心度の高い部分、換言すれば何らかの仕方で人間生活に有益で利用価値の大きい部分と、その全体とが *-a/-o* 対立に包まれる場合である。これは最も強力な *-a/-o* 一般式である果実/樹木及びその変型式の意味関係であり、前節で見たとおり多数の実例を有している。樹木以外では、*racima/racimo*, *ría/río* がこれに属すと思われる。

このように広範囲に普及した *Na—N'o*, *N'a—No* 対立はラテン語源の名詞にとどまらず、非ラテン系の古い語や新しい借用語をもその影響下に収め一層の盛況を呈している。語源については異説があるが非ラテン系の *chancla* ‘スリッパ’ /*chanclo* ‘オーバーシューズ’は *N'a—Eo* (又は *N'o—Ea*) の一例である。下記の語はいずれも *Ea—N'o* 形式の対立語である。

N'o	<	Ea	<
<i>balandro</i> 小形の		<i>balandra</i> 1本マストの	fr. <i>bèlandre</i>
<i>balandra</i>		帆船	
<i>banasto</i> 柳の丸籠		<i>banasta</i> 柳の大籠	celt. <i>benna</i>
<i>barreno</i> 穿孔器		<i>barrena</i> 錐	arab. <i>barrina</i>
<i>jarro</i> 狭口の取っ手付壺		<i>jarra</i> 広口の取っ手付壺	arab. <i>charra</i>
<i>talego</i> 細長い袋		<i>talega</i> 手下げ袋	arab. <i>talica</i>

6. *Na—V'o*, *No—V'a* の対立

ラテン語名詞から出ている *N* と同根のイスパニア語動詞から派生した *V'* が *-a/-o* 対立を示す場合である。

Na	<	lat.	—	V'o	<	V
<i>escala</i> はしご		<i>scāla</i> 階段		<i>escalo</i> よじ登り		<i>escalar</i>
<i>estera</i> 藁		<i>storea</i> 藁		<i>estero</i> 藁を引くこと		<i>esterar</i>
<i>falla</i> きず		<i>falla</i> 詐欺		<i>fallo</i> 判決		<i>fallar</i>
<i>rueda</i> 車輪		<i>rota</i> 車輪		<i>ruedo</i> 回転		<i>rodar</i>
No	<	lat.	—	V'o	<	V
<i>cebo</i> 餌		<i>cibus</i> 食物		<i>ceba</i> 肥畜飼料		<i>cebar</i>
<i>cerco</i> 輪		<i>circus</i> 輪		<i>cerca</i> 囲い		<i>cercar</i>
<i>gobierno</i> 政治		<i>gubernum</i> 操縦		<i>gobierna</i> 風見		<i>gobernar</i>
<i>pelo</i> 毛髪		<i>pilus</i> 毛髪		<i>pela</i> 皮をむくこと		<i>pelar</i>
<i>poyo</i> 腰掛石		<i>podium</i> 露台		<i>poya</i> パン焼料		<i>poyar</i>

silbo 口笛	sibilus 口笛	silba 口笛を吹くこと	silbar
trillo 麦扱ぎ器	tribulum 打穀車	trilla 脱穀(器)	trillar
tronco 幹	truncus 幹	tronca 先端を切ること	troncar
viso 光沢	visus 外観	visa ビザ	visar

この形式にはラテン語名詞起源のNがそれ自身から派生した動詞を経へその変化形又は語幹からV'が生じたケースと、ラテン語動詞に由来するVからV'が形成された場合の2種類がある。また動詞から-a/-o両形が派生するのはいずれも第1変化動詞で、V'a, V'oは動詞的意味を特徴としており、Na, Noが具体的事物を示すのと対照的である。しかし cebaのごとく‘家畜を肥らせること’→‘肥畜飼料’が中心的な意味になっているものもある。この語は同義で用いられていた ceboを駆逐してしまったようで、後者は今日、主に‘釣や仕掛猟の餌’の意で使われる。

7. Va—Vo の対立

ラテン語完了分詞の女性形(・中性複数形)と男性形がイスパニア語-a/-o名詞の起源となっているもの。

Va	—	Vo	<	lat.
conducta 行為		conducto 管		conductus < conducere 集める
data 日付		dato 資料		datus dare 与える
farda 包み		fardo 梱		fartus farcire 詰め込む
hita くぎ		hito 道標		fictus figere 固定する
trecha 策略		trecho 間隔		tractus trahere 引く

-a形-o形のどちらか一方がラテン語時代に既に名詞化し始めていたものもある。

cinta リボン	cinto 帯	cintus < cingere 帯で巻く
deuda 負債	deudo 親戚	dēbitus dēbere 負う
fosa 墓穴	foso 穴	fossus fodere 掘る
pasa 乾葡萄	paso 歩	passus pandere 拡げる

8. V'a—Vo の対立

次の例は lat. 完了分詞から生まれた名詞と、同分詞から派生したラテン語動詞を引き継いだイスパニア語動詞の派生名詞との対立である。

pista ‘足跡’	<	pistar すりつぶす	<	lat. pistāre 粉にする
pisto ‘肉汁’	<	lat. pistus	<	pinsere 踏みつぶす

9. V'a—V'o の対立

イスパニア語第1変化動詞の活用形あるいは語幹から生まれたもので、動詞の語源はほとんど

ラテン語動詞である。

V'a	—	Vo'	<	V'a	—	V'o	<
carga 荷積み		cargo 負担	cargar	posa 吊鐘		poso 沈澱物	posar
casca 殻		casco かぶと	cascar	protesta 抗議		protesto 拒絶証書	protestar
conjura 陰謀		conjuro 悪魔払い	conjurar	roza 溝		rozo 除草	rozar
cría 飼育		crío 幼児	criar	soba 揉み		sobo 揉み	sobar
cuenta 勘定		cuento 物語	contar	sosiega 休憩		sosiego 平穩	sosegar
deja 切り残し		dejo 放棄	dejar	tienta 検査		tiento 探り	tentar
huelga スト		huelgo 息	holgar	traza 設計図		trazo 線	trazar
lía 縄		lío 包み	liar	trova 詩		trovo 詩	trovar
marea 潮		mareo 船酔	marear	marra 欠如		marro 誤	marrar

10. Aa—Ao の対立

ラテン語形容詞から派生した対名詞であるがイスパニア語で完全に名詞化した実例は少なく、多くは形容詞であって名詞に転用されるものである。

Aa	Ao	<	lat.
galga 臼石	galgo グレイハウンド犬		gallicus ガリアの
plata 銀	plato 皿		plattus 平たい
rubia 茜	rubio 〔魚〕かながしら		rubeus 赤味がかった
zanca 鳥の脚	zanco 竹馬		*strambicus 曲った

11. 疑似対立

ラテン語に既に存在していた -a/-o 対立や、現代イスパニア語成立過程の中間段階で生じた対立のうちで、現代語に存続しているものをこれまで取り上げてきた。これら一対の名詞間には派生関係か、密接な歴史的由来関係が認められるものであった。他方、ラテン語で異根・類音がそのまま今日に続いていたり、かつて異形・異義の2語が音韻変化の結果あたかも同一語根に -a/-o 語尾をとったかのごとき外観を有する語や、ラテン系の語に類音の外来語が進入したために、あるいは非ラテン系基層語とラテン語との並列などにより、見せかけの形式対立をなすようになった対語も少くない。例外的現象であるが *reina/reino* のようにラテン語々源において同根・非対立であった2語が、-a/-o の外見的対立へ移行した例もある。

a) Na—No

ラテン語に発見される -a/-us, -um 等の語尾対称で両者間に語形成上の連繫がなかつと考えられるものがそのままイスパニア語に対応対立をもって存続しているか又は *cultismo* により再建されているものがある。*arca* ‘箱’ /*arco* ‘弓形’ はほぼ同義の *lat. arca/arcus* に源を発してい

るし, funda ‘カバー’ / fundo ‘地所’ も lat. funda ‘袋’ / fundus ‘地所’ の写しであるが, 各対の語幹には共通の意味がない。‘やすり’ の意の lima < lat. lima と ‘泥’ の limo < lat. limus は異根で, limus の方は独語 Lehm ‘粘土’, 英語 lime ‘鳥もち’ などにも見られる “ねばねばした状態” を基底とする印欧語根に遡る。carpa ‘鯉’ / carpo ‘手首’ も lat. carpa/carpus から出ている。lat. casa/casus は casa/caso を与えたが lat. casus の原義 ‘落下’ は caída で表わされ, caso は ‘場合, 格’ などの意味で用いられる。pica ‘かささぎ, 槍’ / pico ‘嘴, きつつき’ < lat. pica ‘かささぎ’ / picus ‘音羽きつつき’ にはある種の有縁関係の可能性があるように思われる。次に示すのは異音非対立のラテン語が現代イスパニア語で -a/-o の疑似対立を構成している例である。

Na	<	lat.	÷	No	<	lat.
ana 長さの単位		ulna 前腕		ano 肛門		anus 肛門
acera 歩道		*faciaria		acero 鋼		aciarium 鋼の先端
bola 玉		bullā 球		bolo 棒		bolus 骰の一投
cera ろう		cēra ろう		cero ゼロ		cifra ゼロ
cosa 事物		causa 原因		coso 闘牛場		cursus 走路
estera 葎		storea 葎		estero 川口		aestuārium 沢
foca 海豹		phoca 海豹		foco 焦点		focus かまど, 火
lada シスツス		lada		lado 側		latus 側面
lecha 魚の精液		lāc 乳		lecho ベッド		lectus ベッド
plaza 広場		plattea 広場		plazo 期限		placitus 決められた(日)
reina 女王		rēgina 女王		reino 王国		rēgnum 王国
salma 頓		sagma 鞍		salmo 賛美歌		psalmus 賛美歌
sena 格子の6		sēna(sēni 6の)		seno 懐		sinus 屈曲
sigla 頭字略称		sigla 略号		siglo 世紀		saeculum 世代
suela 靴底		solea サンダル		suelo 地面		solum 土
trama 横糸		trāma 横糸		tramo 区間		trāmes 側道
trena 革帯		trīna(trīni 3の)		treno 嘆き		thrēnus 悲歌
pulpa 肉		pulpa 肉		pulpo 蛸		pōlypus ポリプ
vera 緑		ōra 緑		vero 黒貂		varius 雑色の
vicia スズメノエンドウ		viccia ヤハズエンドウ		vicio 欠点		vitium 過失
b) Na÷Vo						
veta 縞目		vitta 細帯		veto 禁止		vetō < vetāre
c) Ea÷No, Ao, Vo ; Na÷Eo						

ラテン語源の語と非ラテン系基層語又は借用語(ラテン語を経て導入されたものを除く)とが

偶然にも外観上-a/-oの対照を示している。特にEの-aに対しラテン系語は-oを示す語が多い⁶⁾。

Na	<	lat.	≡	Eo	<	
grama はま麦		grāmina pl. 草		gramo グラム		fr. gramme
Ea	<		≡	No, Ao, Vo	<	lat.
almuerza 両手ですくう分量		celt. ambibostea		almuerzo 昼食		*emordium
balsa 水溜り		(¿ prerromano ?)		balso つり上げ綱		balteus 帯
baya 漿果		fr. baie		bayo 蚕の蛾		badius 赤味を帯びた
baza トランプの勝札の数		arab. bazza		bazo 脾臓		“ “
cota 鎖帷子		germ. kotta		coto 禁猟区		cautus 監視された
fonda 宿屋		fr. fonde		fondo 底		fundus 土台
frasca 小枝		ital. frasca		frasco 瓶		flasca 酒器
gabarra 舢		ital. gabarra		gabarro 織りきず		clāvus 釘
gimnasia 体操		gr. gymnasia		gimnasio 体育館		gymnasium 体育館
gira 遠足		fr. ant. chiere		giro 旋回		gŷrus 旋回
joya 装身具		fr. ant. joie		joyo 毒麦		lolium 毒麦
seta きのこと		gr. septá		seto 垣根		saeptum 柵
tiza チョーク		náhuatl tícatl		tízo 半焼炭		titio 炭
tropa 軍勢		fr. troupe		tropo 比喻		tropus 比喻

d) Na≡V'o, V'a≡No

ラテン語名詞から発する語とイスパニア語動詞から派生した語が類音対を構成する。

carda 梳くこと	<	cardar	cardo あざみ	<	cārdus あざみ
costa 海岸		costa 側	costo 費用		costar
cobra 手綱		cōpula つなぎ紐	cobro 領収		cobrar
talla 木彫		tallar	tallo 茎		thallus 茎
templa テンペラ		templar	templo 寺院		templum 神殿
tumba 墓		tumba 墓	tumbo よろめき		tumbar

e) V'a≡Eo, Eo≡V'o

動詞からの派生名詞と借用外来語との対立である。

alegra 穿孔器	<	alegrar	alegro 快速曲	<	ital. allegro
doma 荒馬馴らし		domar	domo ドーム		ital. duomo
arroba 重さの単位		arab. rub	arrobo 恍惚		arrobar

f) N'a≡No

イスパニア語名詞から派生した2次語とNとが-a/-oの対立を見せている。

agüera 用水溝	<	agua 水	—	agüero 前兆	<	lat. augurium 占い
------------	---	--------	---	-----------	---	------------------

aleta ひれ < ala 翼 aleto みさご lat. haliaeetus 尾白鷲
g) Ea→Eo

非ラテン語源である二語の併立も見られる。barra ‘棒’ /barro ‘泥’ : barra は語源不詳だがルーマニア語を除くロマンス語に共通な語根が推定され, barro はローマ以前のケルト系語であると考えられる⁶⁾。bata ‘部屋着’ /bato ‘間抜け’ : 男女の家庭着として用いられる長くゆるい服を意味する bata は esp. guata, fr. ouate, ital. ovatta, ingl. wad, alem. Watte (いずれも詰め綿の意) などの一連の語と関連づけられる。すなわち bata が綿入れの服であったためらしい。bato は吃音で知られるキレネの王 Báttos に由来すると言われる⁷⁾。ropa ‘衣類’ /rope ‘ロープ’ : 前者は fr. robe と同様ゴート語 raupa から来ている。rope は ingl. rope の比較的新しい借用語である。marca ‘しるし’ /marco ‘枠’ : 共に古から伝わるゲルマン系語であり, 恐らく同根に拠る。

意味と無関係なこれらの対照的外形はほとんど全て偶然によるもので, その限りにおいては, 語彙の構造と意味との関係の言語学的分析の対象とはならない。しかし2語の音韻的近似が -a/-o形式を意識させ, 意味の相互依存と正書法上の変化を誘起した例は注目に値する。gira/giro において, gira ‘遠足, 旅行’ は本来 jira と綴られて, fr. ant. chiere から来ている。faire bone chiere ‘よい顔をする’ → ‘歓待する’, ‘ごちそうする’ という言い廻しが入り入れられたもので chiere 自身は esp. cara と同じく ‘顔’ を意味していた。jira は ‘招宴’ の意でも使われて来たが, 19世紀になって giro, girar の連想的干渉から ‘野外の宴’, ‘遠足’ へ意味変化し j も g に書き換えられた。現代語では giro ‘回る’ に一層密接に結びついた ‘周遊・巡回旅行’ の意味に多く使用される。又 jira も同じ ‘旅行’ の意義を gira から採用して語形を回復した結果, gira-jira の同音異綴の衝突を起している⁸⁾。なお上記とは別に, V’a—V’o 対立たる gira/giro いずれも ‘巡回’ が存在する。共に girar の動詞的意味をもった派生語であるが, -a 形は稀用語で giro も ‘回転’ よりも他の転義で用いられる場合が多い。

[注]

1. cerasus <gr. κέρασος ‘桜桃木’ は Πόντος にある地名 Κερασσους から出たという。
2. García de Diego は higo<lat. ficum としている。D.E.E.H. P. 323 & 764
3. その他に, 珍しいケースとして moda ‘流行’ /modo ‘方法’ がある。共に lat. modus に遡るが前者は fr. mode から借用したもので18世紀以降併存している。
4. B.C. 2 世紀頃から強勢長母音+単子音に対し短母音+重子音の形が現われ始め共存するのが常であった。
v. gr. litus, littus; litera littera; cūpa, cūppa —J. Guillén : Gramática Latina, P. 628
5. duela/duelo では後者の語源はラテン語の異なる語である。duela ‘桶板’ <fr. ant. douelle ‘桶板’; duelo 1. ‘決斗’ <lat. duellum = bellum ‘斗い’, 2. ‘悲嘆’ <lat. dolus ‘不実’
6. R. Lapesa : Historia de la lengua española. P.33
7. María Moliner は batueco ‘無受精の卵’ から遡及した連想還元語と考える。また batueco には ‘間抜けな’ の意があり, 同時 las Batuecas (サラマンカ州山中の文化的に遅れた地方) の形容詞である。

— D.U.E. I P.360

8. M. Moliner は D.U.E. II P. 190 に *Hicimos una jira por Italia* の例文を挙げている。D.R.A. はこの語義には *gira* のみを認めている。

参考文献

- Vicente García de Diego : Etimologías españolas, Madrid, 1964
: Gramática Histórica Española, Madrid, 1961
- José Guillén : Gramática Latina, Salamanca, 1963
- Rafael Lapesa : Historia de la Lengua Española, Madrid, 1959
- Heinrich Lausberg : Romanische Sprachwissenschaft, versión española "Lingüística Románica" 2a parte,
Madrid, 1966
- Angel Rosenblat : Morfología del género en español, comportamiento de las terminaciones -O, -A.
N.R.F.H. : Tomo XVI, México, 1962
- Harry J. Russell : The Most Common Spanish Words and Idioms, New York, 1964